



松煙

しょうえん
堀池 雅夫さん

日本でただ一人「幻の墨」を昔ながらの製法で作っているのは、鮎川で工房を営む堀池雅夫さんです。自然災害等で折れたり枯れたりしたアカマツを10年以上置いておくと、周りの部分は白く腐って、脂の多い赤身だけになります。それを小割りにして不完全燃焼で燃やして煤を取っていきます。小さな炎でゆつくりと燃やすため、5分おきに松をくべ足すのですが、500kgの松を1日8時間、計100時間ほど燃やしてようやく

10kgの煤が取れるという大変な作業です。集めた煤に膠を少しずつ加えながら乳鉢に入れて丁寧に練りこみ、乾燥させて墨が完成するまで約半年間もの時間を要する貴重な墨が「松煙墨」です。「松煙墨」は何と言っても、その美しい滲みと青みを帯びた黒い色にあり、書道家だけでなく芸術家にも愛用者が多くいます。堀池さんは顔料を混ぜて色を付けた墨「彩煙墨」を作るなど、伝統を守りながら新たな取組にも挑戦しています。



松煙墨の歴史は古く、飛鳥時代に中国から日本にもたらされたといわれています。江戸時代以降、各地で松煙による造墨が盛んに行われましたが、近代になるとコストの安い鉱物油が使われはじめ、昭和30年代には途絶えてしまいます。和歌山県でも200軒ほどの業者がいましたが、過酷な労働に加えて松材が入手困難になり、同じ頃途絶えてしまいました。◀枯れて死んでしまったかのような松を割ると、脂をたっぷり含んだ赤身が姿を現します。

“Sho-en-boku” is a type of ink stick produced from painstaking labor using pine soot. Thought to have come from China in the Asuka era (approx. 538-710), this is the only place in Japan that it is produced.

「常に高品質な世界一の炭を作るのが、私たち炭焼き職人の仕事です」胸を張ってそう言うのは、秋津川にある紀州備長炭記念公園内の窯で炭を作る職人さんたち。紀南地方の山間部で行われている紀州備長炭づくりは、樹齢20〜40年のウバメガシの原木を切り出し「木ごしらえ」という作業から始まります。これは、曲がつたウバメガシをまっすぐにする作業で、高品質な備長炭づくりのために欠かせない工程です。奥の方から窯に詰めた後、窯口で火を焚き、煙の色が変わるまで3〜5日ほど焚いて口を塞ぎ、220度〜650度ほどの温度で、6〜9日間かけてしっかりと炭化させていきます。その後、窯口を少し

江戸時代の元禄年間に備中屋長左衛門が、秋津川で焼かれていた白炭に「備長炭」と名付け、売り出しました。今では田辺市の特産品となっています。



紀州備長炭

きしゅうびんちやうたん

In the Edo era (1603-1868), Bichuya Chozemon started selling white charcoal produced in the Akizugawa area. He named it “binchotan,” and it has been a special product of Tanabe ever since.



右から
村上 悟朗さん
滝尻 哲雄さん

ずつ開けて空気を送り、じつくり温度を上げていき、精錬をかけます。その後、炭化した原木を窯口近くに寄せ、かき出して、空気にあてて一気に1200度近くまで高めてから引き出します。そこに土と灰を混ぜた消し粉「素灰」をかけて空気を遮断し、消化することによって焼き締めます。職人が約15日間かけて作り上げた紀州備長炭は、世界に誇る高品質な炭として知られています。「さらに時間を掛けじつくりと焼くと、ヒビの少ない美しい備長炭ができ、燃料としてだけではなく、工芸品の材料としても求められている」と言います。古くから受け継がれてきたこの製炭技術は、昭和49年、県の無形民俗文化財に指定されました。



ひのまつくべり



皆地笠

みなちがさ

しば やすお
芝 安男さん

和歌山県知事指定伝統工芸品に認定されている「皆地笠」を作るのは、本宮町皆地に暮らす芝安男さんただ一人です。その昔、この地方に隠れ住んだ平家の落人が、香り高い檜を使って笠を編み出し、熊野詣での人々に広く愛用されるようになった

といわれています。いつからか産地の名前をとって「皆地笠」と呼ばれるようになりました。山に入り、節のない樹齢60年以上の檜を見極め伐採した後、木が柔らかいうちに「材」にしていく作業は、大変根気のいる仕事で、1つの笠を



あじやりがさ
阿闍梨笠

芝さんが作る笠は、檜の脂分が出て雨が降ってもそれをはじくため、修行中の行者が使う「行者笠」や僧侶が使う「阿闍梨笠」などの注文も全国から寄せられました。時を経てあめ色に変化しても機能性はそのままだといえます。

“Minachigasa” is a conical hat made with a lubricant from cypress trees that repels rain. Orders for this hat come from all over Japan.

作るまでに7つの工程があり、それぞれの材料を作るところから全て手作業。「檜を薄く均等に削る」「材」作りが一番大切なんですよ。これを間違えるときつちりと編めないんです」芝さんは子供の頃から父親の仕事を見て育ち、その作り方を覚えたと言います。「昔は他にも8軒ぐらい笠を作る家もあったけど、今では私だけになりました。大阪や奈良から弟子入りを志願してくる人もいますが、作り方の本があるわけでもなく、いい檜の選び方が書いてある物もないですからね。途中で断念していききましたね」後継者がいないのは本当に残念ですが、今でも軽さと雨をはじく特性から川釣りの人や農家の人たちに重宝されています。